

望月 昂・大熊文男著 (A5判 273頁 図43)

心身医学の診療

国立療養所東名古屋病院 深 津 要

この書の特徴の最大のものは、臨床そのものが主体をなしている、ということである。

そのところを、高血圧症に関する項で、内科医である著者の望月博士は、「これは高血圧症にかぎったことではないが、疾患に特有な性格特徴は存在するものなのか、存在するとすればその疾患との因果関係は如何というような発想のしかたは、心身医学的研究の仮説とはなりえても、臨床の実際において心身医学的に患者を診てゆくためには、疾患の成立機序についての安易な解釈論に陥りやすい点で決して好ましいものではない」という考え方を強調しておられる。

本書の前半は、いわゆる心と体の2元論的な立場から心身症を眺めがちになることをつよく警戒して、あくまでも心と体のからみあいという、総合的立場からの心身症の診療という面が固守されている。

一般臨床医が、精神医学的な用語におののき、心身医学的診療の必要性やその意義を十分に認識しながらも、実際の臨床ではついその認識の実践がなされなくなりがちである。

こういった点に関連し、いわゆる心身医学のみを専門にするのではなく、一般の内科臨床医としての立場をおし通し、自らガストロカメラをされ、自らレ線透視をされるという日常の臨床そのものの中に、心身医学の科学的知識を縦横に駆使して病人を眺め診療される、という著者の充実感が本書から活き活きとして汲みとられる。

換言すれば、心身症のみという限

局された疾患だけを考えるという心身医学はすでになく、臨床場面で、医師と病人がともに並行していくという、きわめて重要でまた貴重な診療態度で終始する、という考えがすべての疾患に対してとられている。

きわめて精細な症例記録をかかげつつ、上の立場をくりかえしくりかえし述べられ、心身医学についての学問的展開が明快になされている。したがって、本書は、心身医学の診療、というよりはむしろ、心身医学の臨床とか実際、と言い得よう。各臨床医は本書によって、直ちに、しかも抵抗なく自らの診療場面に心身医学的な考え方を導入し、しかも自らの症例をそう取り扱ういとぐちをつかみうる。これが本書のきわめて大きな特色の一つである。

もう一つの大きな特色は、著者が精神科医である大熊博士が論述しておられる部門である。そこには、精神医学を他科の学問より上位に見るというのではなく、まったく同位から病人の精神例を精神医学的に眺め、しかも他科の医師との診療的協調の立場から眺める、というきわめて大きな特色がみられる。

一般の臨床医は、病人の心理的な取り扱いを巧みになすことを望み、それを何か特別なコツというようなものと考え、しかもそれは経験的にしか得られないと思いこんでいることが多い。

そうした素朴な臨床的な必要性から本書の後半を読まれてもさしつかえなく、また得るものも多いだろう。しかし、著者が最も強調し、しかもそれがなくては臨床での心身医

学的な診療はありえないのであるが、とくに力説しておられるところのもの、すなわち physiognomische Diagnostik (相貌的診断) の重要な意義を本書から学びとることが一番の目的であるべきである。

この相貌的診断は精神科診療のきわめて大きな柱をなすものであるが、この診断技術を臨床各科の診療にとりいれると、いかに多彩な臨床像が病人に存在するものであるかということに気づくとともに、臨床像の力動的把握がいかに興味あるものであるか、という点にひきつけられていく。それほど大きなものである。ところが、この技術の実際については、本書ほど親切に、しかも体系づけて、場面ごとにわけて詳述してあるものは他書には見あたらない。心身医学的な関心を、今や臨床医はみなもっているのに、なお臨床の実際でじっくりしないのは、この著者がわかりやすく、しかも高い学問的内容で説いている診断技術が修得されていないためであろう。もちろん、本書の後半はその技術についての解説のみではなく、精神医学的にみた心身医学的な診療の症例をくわしくあげて、病人を眺める時の臨床医としての構え、考え方を論述されている。このあたりはきわめて有益な知見が得られる。

じつは、お2人の著者の病院には心身症センターがあり、お2人が内科医とし精神科医としてたえず検討され協同的治療をされるという学問的環境のもとでの診療実績から本書が生れた点に最大の意義と特色がある。病人に対するあくことなき臨床的・人間的接近の診療の積み重ねであり、望月・大熊両著者の先生に深い敬意を表し、高次の内容をかように判りやすく著述されたことを謝したい。